

「今、私の晴雨計は！67」

「家を畳む」

平山征夫

年が明けて早いものでひと月が経とうとしている。TVの正月番組が「いよいよオリパラの年です」と声高に叫んでも、ちっともそんな気にならない。同じオリリンピックを迎えるのに、どうしてこんなに前回と気持ちが違うのだろう。年齢もあるだろうが、何か乗れないものがある。もともと、「新銀行東京」等の失政で行き詰まった石原都政が目くらましに登場させたようで気に入らなかったが、廃炉を含め震災復興が思うように進まない現状を見ると「税金の投入順序が違うだろう」

と叫びたくなる。桜なんか見てる余裕はない。

「今年が良い美術展がないなあ」とぼやきながら、新年恒例の大学のゼミの会に出て、その足で東京から新潟に戻った。その新年会最大の話題が「夜中、何回トイレに行くか」だったのは少し情けなかったが、「正月に一本くらい」と思って新潟に戻ってから観た今年最初の映画「ある船頭の話」は良かった。オダギリジョーの初長編監督作品ということと、阿賀町・旧津川町沿いの阿賀野川がロケ地ということもあって選んだ。間もなく川に橋が架かり、その役を終えようとしている渡し舟の老船頭と乗船客のやり取りから、自然と共に生きてきた人たちの

生活が変わってゆく時代を描いたものだが、川を漂流していた少女を救い上げてからはミステリーがかってゆく。これ以上映画の内容には触れないが、11年ぶりに主演を演じた柄本明の好演と、クリストファー・ドイルが撮影監督を務めた阿賀野川の美しいシーンの特筆すべきだろう。夕暮れ真っ赤に染まった川面を音もなく進む渡し船は美しい。これも文明の進化と共に失われた故郷の懐かしい光景だと思つたと老船頭ともども愛しい。

昨年中に書き残してしまったテーマがあり筆を執ったのに、また脱線してしまった。それは昨年12月に柏崎の実家を始末したことでだ。この家は私が小学校三年生

の時、同じ町内の借家から約70m位の処に引越した家で、親父としては鉄道マンの安月給で購入した自家だった。同じ町内だったのは、実家から遠くない処でという母方の祖母の強い要請があったからだ。母親の実家から5軒、借家ながら大きな家でおまわりさんを下宿させていたのから見れば、平屋のいかにもぼろ屋だった(かなり経ってから二階建てに立て直したが・)。ここで両親と兄弟妹三人の戦後何処にでもあった家族は寄り添って生きていた。三人の子供が大学進学希望を持っていると分かると、母も保険の外交員として働き始めた。それでも二男の私と妹の進学はなかなか認められず、私は国立、妹

は短大という条件が付いた(妹は実際には短大から四年制に編入)。それでも進学できたのは、奨学金と高度成長のお蔭だった。

家の前が少し空地になっていてそこに鶏小屋があった。交代で卵を集めに行くのが朝の日課だった。冬はそこに大きなまくらを造って遊んだ。玄関の横の部屋が勉強部屋だったが、親父の古い座卓のような机に手製の足を付けて椅子向きに高くしたのが私の勉強机(不思議と兄の勉強している姿は記憶にない)だったが、冬はすきま風がひどく毛布を巻いていた。

親父はこの家から国鉄長岡駅の客貨車区に通っていたが、毎朝同じ時刻に出て同じ時刻に帰っ

てきた。これに異変が起こるのは豪雪等により国鉄に異常事態が発生した時だ。38豪雪の時は一週間帰ってこなかった。鉄道事故が発生した時もそうだった。事故処理に当たっていたのだろう。事故を報道するラジオの前で母が正座してうな垂れていた姿は忘れられない。後から思えば「国鉄一家」の良き時代だった。

一番印象深いのは小五年頃のある冬の夜の記憶だ。冬凍てつく道路はピカピカになりよく滑る。そうになると「下駄スキー」という下駄の裏に鉄の刃(と言っても平たい)を打っただけのものを履いて道路を滑るのだ。だから正確には「下駄スケート」だ。その夜は深々と音もなく雪が降って

いた。誰も通らない家の前の道路でひとしきりスケートを楽しんで、ふと見上げた電柱の裸電球に照らされた景色は幻想的だった。狭く区切られた電球の明かりの中に空から音もなく雪が舞い降りてくる。じつと見上げていたら、自分が空に舞い上がってゆく錯覚に襲われた。途端に頭をよぎったのは「私って何だろう。私の将来はどんなのだろうか。どう生きてゆくのだろうか」などの想いが次々と頭に浮かんできた。

あれから六十数年が経ち私は今75歳、人生の殆どは見えた。母が98歳で亡くなった時、「七回忌が終わるまで家はそのまま置いといて!」と言っていたハワイ在住の妹も「もういい」と言っ

てきた。形式名義人の私としても「頃合いだな」と思い、昨年夏地元不動産屋に買い手探しを依頼した。「田舎の小規模住宅の買い手探しほど難しいものはない。」

と言われていたが、すぐに電話があり「買い手が付きました。お隣りさんです」とのこと。余りに簡単だったので力が抜けた。男手ではどうしようもないので、妹が来て片づけをしてくれた。仏壇や着物など処分困るものも多かったが、何とか片付き12月初に無事引き渡した。ガランとした家の写真を撮り、最後に玄関の鍵を掛けた時は、さすがにジーンときた。少年時代との決別だった。嬉しいことがあった。お袋さんが木の箱に私たち三人の子供の

頃の記録を残しておいてくれたのだ。大学の卒業証書は額に入れて神棚の隣に飾られていたが、小中高の卒業証書と表彰状、そして通信簿、他に色紙若干、若い時の自分たちの写真のほか私たちの子供の時、私が送った孫たちの写真などだ。色紙には倍賞千恵子さんと大学の恩師宮崎義一先生の色紙があった。倍賞さんはTB Sディレクターになった兄と仕事上の関係があり、柏崎にお忍びで魚など食べに来たことがあったので、その時書いて貰ったものだろう。宮崎先生の色紙は卒業時に頂いたものだろう、「行き詰まれ！打破れ！行き詰まれ！そして打破れ！宮崎義一」と懐かしい先生の字で書かれていた。

表彰状は中学生時代の「夏休み図画展」、「読書感想発表会」のもの。ほかに「右の者は生徒会活動に功労があったのでこれを表彰する」というものがあり、対象欄には生徒会長と野球班とあった。もう一枚高校二年の時のもので「本学年間総務委員を命ずる」というものがあったが、何をやったか全く記憶にない。通信簿は懐かしい。小学校一年の通信簿の担任欄には二人の先生の名前がある。「二十四の瞳」の小石先生のような樋口先生の印は一学期しかない。お産で休まれたのだが、復帰された記憶がない。何十年も経った同級会で「あの時は淋しくて女の子だけでこっそり先生に逢いに行った」との告白。

二年生の時も佐藤先生が樋口先生の代りに来られていた。佐藤先生は93歳で今もご健在、昨年12月生涯学習の講演に柏崎に行ったら、先生が聴きに來られていた。75歳の私が小学二年生の時の担任の先生の前で講演するということになったが、なかなかない事だろう。小学校時代は家族的雰囲気の中で、兄弟のように仲良く過ごしていた。その感じが通信簿にも出ていた。「友達を良くまとめている」というコメントのほか、ノンビリやっていたらしく「もう少しテキパキ行動されたい」「言葉の語尾をはっきりと」などの注文も見える。やや苦手の科目が家庭科だったのは分かるが、後で大好きになる音楽も小学時代の評

価は今一だった。小学五、六年の時の中村先生と、中学二、三年の時の西本先生には大きな影響を受けたが、通信簿にも全人格的教育に心掛けられた両先生のコメントには愛情がにじみ出ている。読み返して印象深かったのは高校二年の時の高木先生のコメントだ。先生は漱石の研究者であったが、「文科系の才智です。他のメンバーと比べて最も文科的です」とあった。しかしその後私は「大の文学部受験に失敗し、横浜国大の経済学部をセカンドチョイスした。私が「文科的」であった証拠も出てきた。英協「大学受験科実践コース会員指導票」国語というものだ。記憶によれば、受験生向け

の添削模擬テストで、二時間で問題を解いて送ると添削して返してくれるもので、何故か日本史の橋本先生に誘われてその試験を受けた。橋本先生は「熱血！ガリ版日本史」で有名な先生、自分で作ったガリ版で授業を進めるのだが、情熱溢れる授業は往々にして次の授業の先生が来るまで続いた。先生の日本史のお蔭で有名私大に多くが合格した。私の兄もその一人、早稲田の仏文に合格、TBSへという人生が開けた。自分のポケットマネーで会員になっておられたのか、先生は難関大学志望の生徒を選んでその都度受けさせていたのだ。そして奇跡が起こった。

添削されて返ってきた指導票に

は92点、1／6243とあった。それを伝えた時先生は嬉しそうな悪そうな表情をされていたのを良く覚えている。渡された賞状もトロフィーも会員である「橋本桂一」の名があった。今回、あの木の箱の傍にかなり錆びていたが先生の名前の入ったトロフィーも置かれていた。

「家を畳む」ことは「途中で人生を畳むこと」だと思った。そう遠くない時期に「人生自体を畳む」ことになるが、どう畳むか、しんと降る雪の夜裸電球の下でもう一度考えたい。

(令和二年1月31日)



雪降る夜 紅